

令和元年6月20日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(B) (海外学術調査)

研究期間：2013～2018

課題番号：25301052

研究課題名(和文) 途上国農村地域における初等教育の教育成果に関する調査—コロンビアでの追跡調査

研究課題名(英文) Non-cognitive skills gained by Escuela Nueva primary schools in Colombia

研究代表者

鈴木 隆子 (SUZUKI, Takako)

九州大学・言語文化研究院・准教授

研究者番号：00437071

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 14,100,000円

研究成果の概要(和文)：21世紀型人材育成において、認知的能力と共に非認知的能力を身に着けることはこれまで以上に重視されている。当研究は教育の質に定評があるコロンビアのエスクエラヌエバ小学校の卒業生の追跡調査を行うことによって「教育成果」を明らかにしようとした。先行文献から抽出した「自律学習」「自尊心」「民主的態度」を非認知的能力を測る指標とし、2014年に小学校を卒業したばかりの生徒約1000人に質問票を配布した。その結果「自律学習」が「教育効果」として実証された。同じ生徒が中学最終年になった2017年に再度調査し比較分析した結果「自律学習」への影響は見られなかったため、「教育効果」の維持が困難なことがわかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

国際教育開発において「教育の投入」「教育過程」「教育効果」の研究については比較的多くの調査が実施されているのに対し、より深く長期的な調査を必要とする「教育成果」についてはあまり多くない。しかし持続可能な教育開発のために、教育投資根拠として「教育成果」を示すことが求められる。そこで当研究は、時間のかかる追跡調査を行うことによって、小学校の学習内容が国家社会あるいは卒業生個人の人材育成において社会便益および個人便益をもたらしているのかどうかを検証し、その「教育成果」を明らかにすることによって、教育制度の改善を目指す。

研究成果の概要(英文)：Escuela Nueva of Colombia is one of the well-known excellent programmes for rural schools. It promotes high quality education for high academic scores as well as non-cognitive skills. These skills are especially highlighted and required for the next generations to survive in the highly globalized society and sustainable development. This five-year international research tried to proof if this successful achievement is maintained years after graduation by longitudinal studies of its graduates. We distributed questionnaires to measure autonomous learning, self esteem and civil behavior in 2014 with 1,037 Grade 6 students who have just graduated from primary schools. Then We distributed the same questionnaires in 2017 to the same students who were now at Grade 9 and compared the results from 2014. We found positive correlations with autonomous learning in 2014 but not in 2017. This revealed that the impact of primary education was despaired during the three years of secondary education.

研究分野：国際教育開発学

キーワード：教育学 国際開発学 コロンビア エスクエラヌエバ 自律学習 自尊心 民主的態度 非認知的能力

1. 研究開始当初の背景

近年、国際社会は「万人のための教育(EFA)」「ミレニアム開発目標(MDGs)」「持続可能な開発目標(SDGs)」等の国際的目標に即し、開発途上国の教育普及と質の向上のために投資してきた。それを評価するとき、教育の内部効率性、公正度、外部効率性、外部効果は非常に重要な評価指標となる。それらは「教育の投入(inputs)」「教育過程(process)」「教育効果(outputs)」「教育成果(outcomes)」の関係によって分析されるが、「教育の投入」と「教育効果」の関係や「教育課程」の描写については比較的多くの調査報告が出ているのに対し、より深く長期的な調査を必要とする「教育成果」についてはあまり多くない。

世界的なグッドプラクティスとされるコロンビアのエスクエラヌエバ(Escuela Nueva)プログラムも例外ではない。エスクエラヌエバは、農村の貧しくて小学校にいけない児童に対して、安価な学校として複式学級を取り入れた新しい学校制度を生み出し、質の高い公立小学校へのアクセスを高めてきた。その歴史は1987年までさかのぼり、この30年の間にエスクエラヌエバは2万校以上の農村の公立学校に拡大し、南米14か国の約500万人の児童に教育の恩恵を与えてきた。最近ではアジアやアフリカの国々にもその影響を与え、エスクエラヌエバを導入しようとする国や地域も増えている。2012年ベトナムでは全ての小学校をエスクエラヌエバ方式にすることを決定した。

エスクエラヌエバは従来型の学校とは異なり、児童中心の積極的な学習、児童の日常生活に即したカリキュラム、柔軟性の高い学歴による柔軟な進級制度、学校とコミュニティの密接な関係、従来の講師ではなくファシリテーターとしての教員の役割、一方通行ではない新しい教科書など革新的な教育手法を導入してきた。これらの画期的な学習方法により、エスクエラヌエバは単に学校に行けない子供たちに教育のアクセスを提供しただけではなく、学業成績や修了率のような質の高い教育を確保してきた。その質の高さからエスクエラヌエバは世界中で注目を集め、その画期的な「教育効果」について、学業成績や出席等の効果が高いことがこれまでの調査で証明されている。

エスクエラヌエバが目指してきたものは学習成績だけではない。これらの革新的な教育手法により科目の勉強の習得だけでなく、自律学習、自尊心、民主的態度といった非認知的能力を身に付け、それを社会で活かして、よりよい市民生活を送ることを目的としている。これまでの「教育効果」を測定する調査によって、児童の高い非認知的能力が証明されている。

だが、果たして学校の中で身に着いた能力は、実際に小学校を出た後の人生において役立っているのだろうか。この卒業生たちは、これらの能力を活かしてよりよい生活を送っているのだろうか。学校だけでは終わらないエスクエラヌエバにおける長期的な「学習成果」は、人間開発的にあるいは社会開発的に、個人あるいは社会に残っているのだろうか。

2. 研究の目的

このような疑問に答えるべく、この研究は、エスクエラヌエバ小学校の卒業生が、卒業後どのような進路を進み、現在それぞれの人生において、エスクエラヌエバで身に着けた自律学習、自尊心、民主的態度がどれほど継続的に身に付いているのかを明らかにしようとするものである。つまり、当研究はエスクエラヌエバ小学校の卒業生の追跡調査することによって、エスクエラヌエバで提供する非認知的能力の「教育成果」を測ることを目的とする。

3. 研究の方法

以下の図の通り、平成25年(2013)から平成30年(2018)の6年間、調査を行った。平成26年(2014)にコロンビアの2州にある小学校(1-5年生)を卒業して、中学校(6-9年生)に進学した約1000名の生徒を対象とした追跡調査を行った。

初年度は準備時期とし、先行文献レビューと理論構築を行った。専攻文献より非認知的能力を測定する説明要因を「自律学習」「自尊心」「民主的態度」の3つに絞り、それを示す指標を測定するための質問票を作成した。さらに現地調査計画を立て、調査枠組み、規模、範囲、場所、対象、調査法、調査指標等を設計した。作成した調査票を試行するためパイロットスタディを実施し、調査計画の確認および見直しを行った。2年目以降は展開時期とし、コロンビアのアンテオキア州とキンディオ州において小学校卒業生の追跡調査を行った。

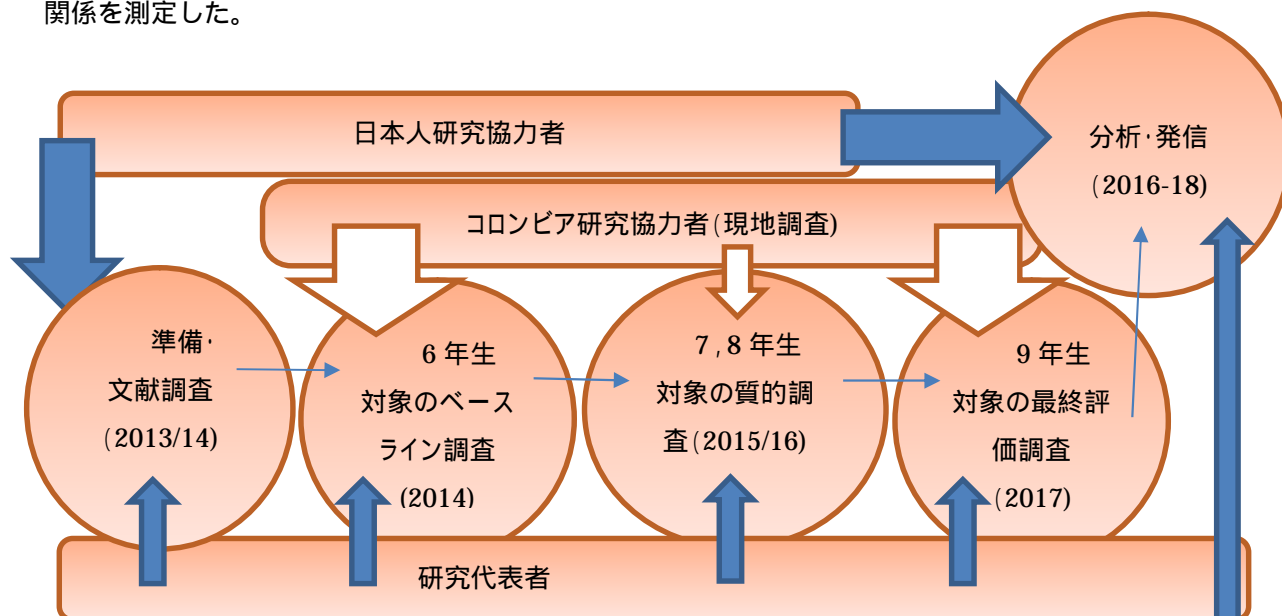
まず平成26年(2014)に小学校を卒業したばかりの中学一年生(6年生)約1000名を対象に「自律学習」「自尊心」「民主的態度」を測定する質問票を配布し、ベースライン調査を行い、統計分析を行った。これにより、小学校の「教育効果」を測定した。

同様に平成29年(2017)に中学校最終年(9年生)になった同じ生徒に同じ質問票を配布し、同様に統計分析を行った。平成29年(2017)から30年(2018)にかけて、この結果をベースライン調査の結果と比較分析することにより、小学校の「教育成果」を測定した。

この二つの調査の間の2年間は、生徒が中学校最終年になるのを待ちながら、毎年コロンビアを訪問し、対象者の在籍確認と共に、事例数を限定して質的調査を実施した。

統計分析の方法は、因子分析、分散分析、回帰分析、重回帰分析を用いた。まず、因子分析で「自律学習」「自尊心」「民主的態度」の各指標を説明する要因を特定した。次に分散分析で、

「自律学習」「自尊心」「民主的態度」とエスクエラヌエバの関係を測定した。エスクエラヌエバ小学校の非認知的能力を伸ばす「教育投入」および「教育過程」を四等分して4つのレベルに分け、そのレベルと「自律学習」「自尊心」「民主的態度」それぞれの関係を測定した。最後に回帰分析と重回帰分析を行って、「エスクエラヌエバ」の他「都市・農村」「ジェンダー」「家計状況」「留年率」「母親の学歴」を含めた外部要因と「自律学習」「自尊心」「民主的態度」の関係を測定した。



4. 研究成果

まず平成26年(2014)に小学校を卒業したばかりの中学一年生(6年生)約1000名を対象に「自律学習」「自尊心」「民主的態度」に関する小学校の「教育効果」を測定するベースライン調査の結果、「自律学習」はエスクエラヌエバとの正の関係が見られたが、「自尊心」「民主的態度」では見られなかった。むしろ「自尊心」は負の関係が見られた。つまり、調査対象のエスクエラヌエバ小学校において、「自律学習」の「教育効果」は見られたが、「自尊心」「民主的態度」に関する「教育効果」は見られなかった。

したがって、平成29年(2017)の最終評価調査では、「教育効果」のみ見られた「自律学習」のみに指標を絞って比較分析をした。その結果、6年生の時に見られた「自律学習」の「教育効果」は、9年生に進級した時には明確には見られなかった。6年生の時は「自律学習」を説明する6要因(支援、協力、自主性、学習、動機、多様性の容認)のうち自主性、動機、多様性の容認と6要因の合計において、エスクエラヌエバに対して正の関係が見られたが、9年生の時は自主性のみで、自律学習の合計としては検出されなかった。同様に、回帰分析において、6年生の時は「自律学習」はエスクエラヌエバと家計状況による影響が見られたが、9年生の時には見られなかった。すなわち、エスクエラヌエバ小学校の卒業直後には「教育効果」として自律学習の優位が見られたが、3年後の中学卒業時にはそれは見られなくなっていた。つまり3年後の「教育成果」は見られなかったのである。4年間の、都市部における一般的な講義形式の中等教育を受けた結果、生徒たちの多くはそこに順応し、差異はかき消されてしまったのだろう。

このことから言えることは、非認知的能力を育成する特別な措置は継続しなければ、能力の維持は困難であるということである。都市部における一般的な講義形式の中学校においても、非認知的能力の育成を促進しなければならない。あるいは、小学校が中心のエスクエラヌエバから中等教育への延長を促進すべきなのかもしれない。どちらにしても、せっかく小学校において育成し身に着いた能力も、中等教育の画一的な教育の中で消されてしまうので、小中学校における継続が重要である。これは非認知的能力のみに限らず、小学校における英語教育や情操教育等においても、受験対策中心の中等教育にとって代わったとたんに、それまでの効果がなくなってしまう可能性について示唆しているだろう。それを避けるために、教育方針の継続性の維持は重要である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 2 件)

SUZUKI Takako, Data collection process for non-cognitive skills gained by Escuela Nueva primary schools in Colombia, *Studies in Languages and Cultures*, 査読なし No. 38, 2017, pp.99-111.

〔学会発表〕(計 11件)

SUZUKI Takako, Autonomous Learning gained by Escuela Nueva primary schools in Colombia: Comparison between Grades 6 and 9, Comparative and International Education Society in San Francisco, 2019

SUZUKI Takako, MIWA Chiaki, NISHIMURA Mikiko and HATTA Naoki, Non-cognitive skills and future expectations: From the tracer study of Escuela Nueva in Colombia, 第53回日本比較教育学会(東京大学), 2017

鈴木隆子、三輪千明、西村幹子「非認知的能力におけるエスクエラ・ヌエバの効果 - 卒業生の追跡調査結果から - 」第52回日本比較教育学会(大阪大学), 2016年

SUZUKI Takako, Non-Cognitive skills gained by Escuela Nueva primary schools in Colombia: Autonomous Learning of fresh graduates, Comparative and International Education Society in Vancouver, 2016

SUZUKI Takako School outputs of Escuela Nueva primary schools in Colombia: Based on the attitude and behavior of fresh graduates, International Council on Education for Teaching the 59th World Assembly, 2015

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

○出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：三輪 千明

ローマ字氏名：MIWA Chiaki

所属研究機関名：広島大学

部局名：大学院国際協力研究科

職名：准教授

研究者番号(8桁)：00345852

研究分担者氏名：西村 幹子

ローマ字氏名：NISHIMURA Mikiko

所属研究機関名：国際基督教大学

部局名：教養学部

職名：教授

研究者番号(8桁): 20432552

(2)研究協力者

研究協力者氏名: クラリタ アルボレダ
ローマ字氏名: Clarita ARBOLEDA

研究協力者氏名: ハイロ アルボレダ
ローマ字氏名: Jairo ARBOLEDA

研究協力者氏名: ヴィッキー コルバート
ローマ字氏名: Vicky COLBERT

研究協力者氏名: 黒田 一雄
ローマ字氏名: KURODA Kazuo

研究協力者氏名: アンジェラ リトル
ローマ字氏名: Angela LITTLE

研究協力者氏名: 元兼 正浩
ローマ字氏名: MOTOKANE Masahiro

研究協力者氏名: 斉藤 泰雄
ローマ字氏名: SAITO Yasuo

研究協力者氏名: フリアナ ヴェマサ
ローマ字氏名: Juliana VERNAZA

研究協力者氏名: エドワード ヴィカース
ローマ字氏名: Edward VICKERS

研究協力者氏名: 吉本 圭一
ローマ字氏名: YOSHIMOTO Keiichi

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。